

村のため池の価値

主任研究員 若林剛志

ため池の今日的な価値は多面的機能を踏まえるべきではないか。2種類の「生活共同体」の概念を手がかりにして考える。

1 「生活共同体としての村」のため池

村の池は、大方「生活共同体としての村」の農業用ため池である。戒能(1943)は主として1888年の町村制施行後の村の性格を「行政単位としての村」、それ以前からの性格を「生活共同体としての村」とした。入会研究においてはなじみの用語である。同書の主題である入会との関係で言えば、入会のような資源の利用において慣習に基づき関係者が総体として持つ支配的あるいは占有的関係は、「生活共同体としての村」に由来し、古くから備えられているものと考えることができる。

そして、これに池を付加し「生活共同体としての村」の池(以下「『村』の池」とすると、入会集団(ここでは村民)が自治的管理の下、共同で利用する池、特に農業用ため池を想起させることになる。

2 生活共同体としての村の池

「生活共同体としての村」に池をつけ「生活共同体としての村の池」(以下「『村の池』」)とすると、日本の理科教育に多大な影響を及ぼしたユンゲの著作の標題となる。

しかし、ユンゲの言う生活共同体は、人間生活における共同体という訳ではなく、「生活共同体としての村」の生活共同体とは意味が異なる。彼は、生物の連鎖や相互作用といった生態系およびそこにある自然そのものを、生物主体から見た生活共同体と呼んでいる。したがって、池に生息する生物、水等の無機物を含む淡水湖沼における生態系とそれを取

り巻く環境を念頭に置いて、『村の池』と題した。しかし、もし単に湖沼生態系を念頭に置くのなら、タイトルを「生活共同体としての池」としてもよいはずである。ユンゲは理科教育における帰納的あるいは発見的側面を強調し、「単なる書かれたものや表面的な知識を媒介とする教授法からまず教師自身が開放され、直観という基礎に立って法則性を子供に認識させることが博物教授の目標とならなければならない」と述べている。そうであるなら、単に池とすれば足りるであろう。

それでは、ユンゲがタイトルにあえて「村の」を入れたのはなぜであろうか。書中に直接的な表現は見られないが、連想させる表現はいくつかあり、そのなかでも「子供に」は鍵となる用語である。事は平生にあると言うが、子供の生活圏である「村の」とすることで、身近な素材が理科教育の出発点として極めて重要であり、学びの材料が凝縮されていることを伝えたかったのではないか。実際に、遠い世界の話でなく「前面に郷土の知識を」教えるべきであるとの立場から、それまでのドイツにおける理科教育を「郷土の田野の装いとしての草木のもつ意味のために(中略)ほんの数行さえ費やしていない」と批判している。

3 両者の相違と一致

2つの生活共同体としての村の池がそれぞれ指すところは明らかに異なる。『村』の池が、旧来からの慣習に基づきながら農業生産に利用される共有資源としての池を対象としているのに対し、『村の池』は生態系を学ぶ対象であるという違いがある。さらに生産への池の利用度合としての水の收支フローに目を向けると、日独の地理的相違を反映して大きく異

なると考えられる。『村』の池は、日本の穀物生産の中心である水稻作に利用される一方で、『村の池』は、ゲルマン的共同耕地か否かは明らかでないものの、水車で粉引きをする描写があることから麦作等を念頭に置いているからである。

それでもこの2つには一致する点もある。ここでは2点挙げよう。第1は、人間生活への密着度である。『村』の池に異論を挟む余地は少ないとと思われるが、『村の池』が生態系に焦点を当てていることから、密着度を両者の共通点とすることに違和感を覚えるかもしれない。しかし、池が「村すなわち人間の共同体に属している」として、生態系と人間生活との連関に触れ、また「わたくしたちの村の池」とする身近さや「水くみ」「洗濯」、粉引きを行う「水車」という記述から、池の人間生活に対する密接性の高さが直接的に確認できる。日本のため池のように、生産のために多量の水を利用するることは少ないかもしれないが、こと生活への密着度合という点では、ユンゲの取り上げた池は日本の『村』の池と符合するところがある。

第2は、ため池を想定していることである。すなわち、いずれも生活共同体としての村のため池なのである。『村』の池がため池であることへの異論は少ないのであろうが、実は『村の池』も単なる池でなく、村のため池なのである。それはとある「H村」を事例として、「くねくねとしている」「水路は、堰ができるまえ」は「谷を流れていた小川の名残」という記述から明らかである。

4 ため池の価値

以上のように、生活共同体には少なくとも2つの意味がある。したがって、ため池もこの2つの意味を含んでいる。

(注)ユンゲは北ドイツのホルシュタイン公国生まれであり、その後その地が属す国名はプロイセン、ドイツ帝国へと変わっていく。

ユンゲが『村の池』を著したのはちょうど130年前である。「生活共同体としての村」で想定されている入会慣行はそれより前から存在するものである。この間、水を基点とする生物の営みの様相はそれほど変化しておらず、教育的機能等の多面的機能に触れているユンゲの『村の池』の意味は、洋の東西、世紀を問わず大きく変わっていない。現代日本のため池にも当てはまると言えよう。その一方で、日本の入会ため池の農業生産への利用は、以前より乏しくなり、生活水源をそこに求める必要性は必ずしもなく、『村』の池の形骸化が始まっている様相すらうかがえる。

ユンゲは言う。「人間は自然を自分に役立てようとすればするほど、それに依存」する。記した入会ため池の必要性の低下は、ため池への依存度が低下したためかもしれない。しかし、集落の機能に生産補完、生活扶助、資源管理の各機能があるように、ため池についても農業生産や人間生活への役割や、多面的機能といった諸機能を考えることができる。それら各機能の相対的重要性は、時とともに変化する相対的なものだと考えられはしないだろうか。

続けてユンゲは言う。「全体を(中略)観察せよ」と。一時点できえ、我々人間の視点から全体を観察することは至難の業である。故に、ため池の価値を正確に理解することは困難である。ユンゲの著作は、第一義的には教育におけるため池という題材の重要性を述べている。これに加え、ため池の生態系における相互作用を認識し、人間を含む生物、生物をとりまく資源をそれぞれ主体として見ると同時に客体として見る多元性の必要性も読み取ることができる。それがユンゲの言う生活共同体だからである。この視点こそが、ため池が持つ価値の把握に接近する近道であるよう思える。

＜参考文献＞

- ・ 戒能通孝(1943)「入會の研究」日本評論社
- ・ ユンゲ,F.(1891)『生活共同体としての村の池』(山内芳文訳)明治図書出版

(わかばやし たかし)